プログラム・ノート

解説＝飯尾洋一

ラテン文化の情熱あふれる色彩豊かな音楽

音楽と密接に結びついているのがダンス。大衆的な民俗舞曲からバレエのような様式化されたダンスまで、あらゆる踊りが音楽を伴います。踊りのための音楽は、やがて踊りを抜きにして、聴くための舞曲として発展するもの。本日演奏されるのは、そんな踊りから生まれた名曲たちです。フラメンコやホタといったスペインの民俗舞曲や、タンゴなど、色とりどりの踊りの音楽がとりそろえられました。

タンゴに欠かせない楽器、バンドネオンの活躍も見どころ。この分野の第一人者、小松亮太がガーデ、ピアソラ、そして自作楽曲でバンドネオンを披露します。蛇腹状の部分はアコーディオンを連想させますが、鍵盤はなく、複雑に配置されたボタンを操作して演奏します。自作楽曲は本日が世界初演。はたしてどんな作品が誕生するのでしょうか。

マエストロ三ツ橋による、躍動感あふれる踊りの音楽をお楽しみください

アンダルシア地方の歌や踊りに影響された狂詩曲

Emmanuel Chabrier

エマニュエル・シャブリエ（1841-1894）はフランスの法律家の家庭に育ちました。幼少時より音楽の才能を発揮しましたが、両親は息子を法学部で学ばせます。卒業するとシャブリエは親の希望に従って内務省に就職しました。これで一安心。両親はそう思ったことでしょう。

しかしシャブリエは仕事のかたわら、作曲活動を続けました。ワーグナーのオペラ『トリスタンとイゾルデ』上演に接した際、音楽こそが自分の天職であると確信し、1880年、39歳になって役所を退職し、作曲に専念すると決断します。シャブリエのことをアマチュア音楽家だと思っていた友人たちは心配したといいます。

それから3年後、シャブリエはスペインを旅行した際の印象をもとに**狂詩曲『スペイン』**を書きあげました。アンダルシア地方で目にした歌や踊りにインスピレーションを受け、シャブリエはその興奮と熱狂を華麗な狂詩曲に綴ります。初演は大成功を収め、シャブリエの名声を一躍高めることになりました。

わずか数時間で曲を書きあげられた世界的ヒット曲

Jacob Gade

作曲家の名前や曲名は知らなくとも、曲は聴いたことがある。そんな名曲がいくつもあると思いますが、**ヤコブ・ガーデ**（1879-1963）の**「ジェラシー」**もそのひとつでしょう。タンゴの名曲として、さまざまなアレンジで広く親しまれています。

作曲者のガーデはデンマークの作曲家、ヴァイオリニスト。劇場や無声映画時代の映画館のために作曲やアレンジを担当し、オーケストラを指揮するなど、主にポピュラー音楽の分野で活動しました。あるとき、ガーデは新聞で男が嫉妬のため妻を殺害したというニュースを目にします。恐ろしい事件のことを考え

ているうちに、ガーデの頭には「ジェラシー」という言葉がこびりついて離れなくなり、これをきっかけにわずか数時間で曲を書きあげたと言います。

こうして書かれた「ジェラシー」は世界的なヒット曲となり、以後、100本以上の映画やテレビ番組に使われることになりました。

「タンゴの革命児」によるジャンルを超えた名曲

アストル・ピアソラ(1921-1992)は「タンゴの革命児」と呼ばれる音楽家。アルゼンチンに生まれ、バンドネオンを演奏し、自らの楽団を組んで、クラシックやジャズのエッセンスを取り入れた新しいタンゴを開拓しました。ピアソラの作品はさまざまな楽器のために編曲され、ジャンルを超えた名曲として人気を集めています。

「アディオス・ノニーノ」と**「リベルタンゴ」**はピアソラの代表作。ノニーノとはピアソラの父を指しています。プエルトリコにツアーに出ていたピアソラは故郷の父の訃報を受け取り、惜別の音楽として「アディオス・ノニーノ」を作曲しました。「リベルタンゴ」は「リベル(自由)」と「タンゴ」を結びつけた曲名。日本ではテレビCMで使われて一世を風靡しました。

アルゼンチンの首都ブエノスアイレスにあるボカ地区はカラフルな街並みで知られる　stock.adobe.com

自作について

◎小松亮太：バンドネオンとオーケストラの習作　　文=小松亮太

タンゴ、あるいはテレビ番組のテーマ曲やアニメソングなどの世界では、そこそこ良い曲も書いてきた僕だが、こうしたクラシック・スタイルの曲を書くのは、ほぼ初めてである。東京フィルの皆さんや三ツ橋さんからも、お客様からも厳しい判定が下されることは覚悟しているし、甘い世界ではないことは僕も理解しているつもりではいる。とにかく60歳ぐらいまでにプロの作曲家になれたら……という願望を込めた習作である。機会を与えてくださった東京フィルとスタッフの皆さんに深く感謝申し上げます。

この曲を形式的にはどのように呼んだらよいのか、現時点では自分でもわからない。が、とにかく3部構成で、バンドネオンが目立つというよりは、むしろ隠し味的に役立つように書いたつもりである。タンゴ性は敢えて入れなかった。ある作曲家（敢えて名前は伏せる）への憧れを恥ずかしげもなく混入させてしまったが、ご笑納いただければ幸いである。

傑作オペラ『カルメン』のエッセンスを凝縮

カルメンといえば、魔性の女の代名詞。**ジョルジュ・ビゼー**（1838-1875）の傑作オペラ**『カルメン』**ではスペインのセビリアを舞台に、生まじめな竜騎兵のホセが奔放なジプシーの女カルメンと出会ったことから破滅へと至る物語が描かれます。

『カルメン』の舞台となったセビリアの代表的観光地「スペイン広場」　stock.adobe.com

第１組曲の第１曲は**「前奏曲～アラゴネーズ」**。不吉な運命を予感させる第１幕への前奏曲の後半部分と、劇中の情熱的な民俗舞曲が組み合わされます。第２曲**「間奏曲」**はフルートとハープによる清澄な音色が印象的。第３曲は**「セギディーリャ」**。舞曲のリズムに乗って、カルメンがホセを誘惑します。第４曲**「アルカラの竜騎兵」**はカルメンに会いに行くホセが口ずさむメロディ。第５曲**「闘牛士」**はオペラ本編では第１幕への前奏曲の前半部分に相当します。晴れやかに闘牛士たちが行進します。

フラメンコとホタによる情熱溢れる舞曲

マヌエル・デ・ファリャ（1876-1946）はスペインの民族主義を代表する作曲家。**バレエ音楽『三角帽子』**はアンダルシア地方の民話にもとづく小説を題材に、代官が若い粉屋の妻に横恋慕したあげくに懲らしめられるという物語が描かれます。三角帽子とは権威のシンボルとなる三つ角の立派な帽子のこと（子供のパーティなどで見かけるとんがり帽子ではありません）。三角帽子をかぶって威張り散らす代官が散々な目にあって、庶民たちが溜飲を下げる。そんな日本の時代劇にも通じるような痛快さが音楽からも伝わってきます。

トリコーン（トリコーヌ）ともよばれる三角帽子。上から見ると三角形に見える

「粉屋の踊り」は酒宴で踊りを促された粉屋がフラメンコの舞曲ファルーカを踊り出す場面の音楽。歯切れのよいリズムを伴って、重々しいダンスが踊られます。続く**終曲**はスペインの激しい民俗舞曲ホタ。代官を追い払った粉屋の夫婦と村人たちが喜びを爆発させます。

いいお・よういち（音楽ジャーナリスト）／著書に『クラシック音楽のトリセツ』（SB新書）、『R40のクラシック』（廣済堂新書）、『マンガで教養　やさしいクラシック』監修（朝日新聞出版）、『クラシックBOOK』（三笠書房）他。雑誌やウェブ、コンサート・プログラム等に幅広く執筆する。テレビ朝日「題名のない音楽会」他、放送でも活動